



寝取られ・浮気

小咄集

文 懺悔
画 河川敷

本作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

また本作品を無断で複製、配布、転載、配信することを禁止します。

※本作品は見開き表示がデフォルトで設定されていますが、左右のページが逆で表示される場合は、左記の設定変更をお試しください。

「編集」 ↓ 「環境設定」 ↓ 「言語（もしくは言語環境）」 ↓ 「デフォルトの読み上げ方向」 ↓ 「右から左へ」を選択

目次

砂漠で雨乞い	前編	3 p
	中編	3 7 p
	後編	5 9 p
吞まれて咲いて、恋の徒花	前編	7 3 p
	後編	1 0 3 p
ホット・モア・ホット	前編	1 2 5 p
	中編	1 5 1 p
	後編	1 6 9 p
陽だまりの幸	前編	1 8 5 p
	中編	2 2 7 p
	後編	2 5 3 p
こちら少子化防止委員会の者ですが	番外編	2 7 1 p

二十八歳にもなって運命だの本当の恋だの、そんなセリフを聞かされる事になるとは思わなかった。

平日夜の居酒屋は、どこか自棄じみた活気に溢れていた。客の大半が同窓会によるものだとしたら尚更だ。皆は昔を懐古し、そこには社会的格差など存在せず、ただただ無礼講で杯を交わしている。私はこういった雰囲気が苦手なので最初は出席を見送ろうと思った。会いたい友人が居れば個別で会えば良いのだと、我ながら冷めた考えをしていた。しかし夫の「折角だから行ってきなよ」という声もあり何とはなしに足を運んだが、やはり家で夫とお茶を呑みながらドキュメントリー番組でも観ていた方がよほど心が安まった。

「それでね、英里、聞いている？」

「はいはい。聞いているわよ」

「その人とはね、心が繋がってるの。これが真実の愛なんだってね、確信してる

の

今度は真実の愛ときた。

私の隣でへべれけに酔って、うっかり会社の上司との不倫について語っているのは、学生時代にはお堅い学級委員として知られていた女の子だった。おさげで眼鏡というステレオタイプな出で立ちで、その容姿に負けずとも劣らないほど定型的な内面だった彼女は、ちよつとした私の憧れだった。誰にも媚びず、常に公正で、男子も教師も彼女を畏れ敬っていた。

しかし今では不倫にハマる〇〇という自堕落っぷり。時の流れは非常である。「英里は恋愛してる？」

「結婚してるから」

私は苦笑いを浮かべながら指輪を見せつける。

「駄目だよお。ちゃんと女は恋をし続けないと、乾いて干からびちゃうんだからあ」

まるでティーン雑誌のキャッチコピーのようなセリフを恥ずかしげもなく口にする。

「そうかな。ケアとかはきちんとやる方なんだけど」

「そうじゃなくてえ、心だよ心」

彼女の変貌に最初こそ驚きはしたが、彼女の恋する女子トークに対して律儀に相づちを返す。勿論不倫など褒められた行為ではないが、きっと彼女にも色々あるのだろう。

やがて彼女が机に突っ伏し口を利かなくなる頃に同窓会は閉会となった。

「今日は二次会は無しね」

幹事の声に不満の声上がるが私としては有り難かった。挨拶もそこそこに集団から逃げ出すように離れる。暫く歩くと後ろから駆け寄る足音と共に私を引き留める声が掛かった。

「おい。渡辺」

振り返るとスーツ姿の青年が私の旧姓を呼びながら手を振っている。

「あっちの駅？ だったら一緒に帰ろうぜ」

「野上君。私もう青木なんだけど」

「ああそっか。なんだか変な感じだよな」

「野上君も結婚してたんだっけ？」

歩きながら会話を続ける。

「ああ。三年前にな」

「あら。私と一緒にだったんだ」

「なんだよ水くさいな。式に招待くらいしてくれても良かったのに」

「そんな仲良くなかったでしょ」

「はっはっは。相変わらずだな。その容赦無い性格。渡辺は変わらなくて安心してよ」

「あ、お、き」

「まあまあ。良いじゃ無いか同窓会なんだし。昔の気分には浸らせてくれよ」

「野上君も相変わらずね。そのマイペース」

「だろ？ 俺の美徳だから。三つ子の魂百まで。でも本当安心するよ。変わら無い同級生ってさ。結構皆変わっちゃうだろ？」

「そりゃね」

委員長の事を想起する。

「でも渡辺は昔のまんまだよ」

「それって褒めてるの？」

「褒めてる褒めてる。クラスのアイドルのままだよ」

「何言ってるんだか。私知ってるんだからね。昔男子が一番可愛い女子を投票で決めたって話。それで私が二位だったってのも」

まあ女子も同じ事をやっていたので咎める事は出来ない。ちなみに一位はダントツで野上君だった。如何にもバスケット部のエースらしく、爽やかで上背のある彼は昔から非常にモテていた。当時の私はその熱狂にピンと来なかったが（投票も馬鹿らしいので辞退していた）、今も変わらず保ち続けているその颯爽とした存在感には、今更ながらに彼が女性を引き寄せる理由がわかった気がする。同窓会における男性陣の中で、明らかに彼は異彩を放っていた。

「俺は渡辺に投票したけどな」

「それはどうも」

軽口で応じながらも私は身構えていた。野上君による一連の発言が口説きなのかそれともただの社交辞令なのかわからない。ただ一つ確かなのは、心拍数が上がっている。先程の委員長の熱弁に当てられたのだろうか。けして男性や恋愛に飢えているわけではないが、自分が乾いているという言葉にははっとさせられた。

共働きの夫婦生活を続けてはや三年。夫との生活は良好だった。夫は物静か

で、生真面目で、思慮の深く、パートナーとしてはこれ以上無いというほど完璧な存在だった。今の私の生活は、盤石に塗り固められた土台による安心感で、心身共に非常に安定していた。

何の不満も無かった。

ただ漠然としたもどかしさをどこかで感じていたのかもしれない。

それを委員長長の言葉で自覚した。安定した土台の上はいつもどこか煮え切らない曇り空で、時折乾いた風が吹き、日に日に干からびていってしまいうような寂しさ。そしてそれを「こんなものだ」と諦めてしまっている自分への虚しさ。

「俺さ、昔渡辺の事が好きだったんだよな」

少し気恥ずかしそうに頬を掻きながら告白する彼の横顔は、まるで今この時が学生時代の放課後を連想させるように初々しかった。

「でもほら、結構近寄りがたい雰囲気あったじゃん？ だから告白は出来なかった」

「私ってそんなツンツンしてた？」

「そうじゃないよ。孤高っていうかさ。この子の将来はスーツがバシッと似合うキャリアアウーマンになるんだろうなって思ってたから、今日の渡辺の姿は俺の予

想通りだったよ」

「別にキャリアアウーマンってわけじゃ」

「でも総合職だろ？」

「まあ、一応」

「ほら、俺の見る目は合ってた」

照れ隠しなのか大仰にふんぞり返る。私はなんだかおかしくて笑ってしまった。その隙について右手をそっと握られた。

「あと、もう一個予想すると……」

「……なに？」

私は何故かその手を振り払えないでいた。何事も無かったかのように歩き続ける。自分で自分がわからない。一体何を期待しているというのか。

「旦那さんとは物足りないって感じてる？」

「……そんな事無いけど」

心拍数が更に跳ね上がる。こんなにも心臓の音が五月蠅いと感じたのはいつ振りだろうか。

「でも、一回くらいなら、火遊びしてみたいと思ってる」

「考えた事も無いよ」

そう。

そんな馬鹿げた考えた事も無い。

なのに私を引つ張る彼の力強い手に逆らう事は出来ず、そのままホテルへと連れられていつてしまった。

彼が部屋を決めている間、エレベーターで唇を奪われている間、私は一言も発する事が出来なかった。足の震えを誤魔化すのに精一杯。

「夫が待つてるから」

「奥さんに悪いよ」

何度も口に仕掛け、喉の奥で立ち消えた。

部屋に入ると彼は自分の上着を脱ぎ、私の上着も預かるとそれを備え付けのハンガーに掛けて、私をベッドに座るよう促した。

「ずっと好きだった」

彼は泳ぎそうになる視線を何とか抑え付けるように私を真っ直ぐ見つめてそう言いながら唇を再び重ねてきた。彼の顔が近付くと、清涼感のある整髪剤の香り

が鼻腔をくすぐった。

「実は今日もさ、男達で投票したんだ。殆ど皆渡辺に入れてたよ」

耳元で吹きながらブラウスのボタンをゆっくり一つづつ外していく。その指は若干震えていた。彼も恐いのだ。

「すごいね」

ブラジャーだけになった上半身を彼は食い入るように見つめた。

「……あまり見ないで。好きじゃないの。自分の胸」

「綺麗だよ」

そう言いながらも、彼が大きさに言及したがっているのは明白だった。

彼の手は大きく、夫では掴み切れない私の乳房を、なんとか手中に収めると、

「こんなに大きいのが、触ったの初めてだ」と感嘆の声を漏らした。デリカシーの無さに怒るか迷ったが、彼の言葉があまりにも熱に浮かされた少年然としていたので何も言えない。

「すごい弾力……」

まるでひとり言のように呟く。同時に彼の指先が私の乳房に埋没する。

「んっ」

「あ、ごめん。痛かった？」

「ううん大丈夫……そんな強くされたの久しぶりだから」

彼は自分を律するように一度目を瞑り、少し自分を落ち着けてからブラジャーをややずらすと、そっと乳頭に顔を近づけ、そしてそれを含んだ。私は背筋を伸ばしたまま、両手を膝の上に重ねていたが、彼の舌使いが絶妙で、何度か顎を引いて「やっ」と吐息を漏らしていると、スカートの中がじんわりと湿ってきているのを感じた。

左右の乳首を丹念に舐め上げると、野上君は私を後ろから覆い被さるように座り直した。

背後から両手が伸びるとそれらは私の乳首を摘まんだ。一見スマートに見えた彼の指先はやはり男らしくごつごつと険しい感触だった。

「あっ」

思わず目を細めて、か細く弱々しい声を上げる。

背中に彼の鼓動を感じた。私と同じように爆ぜてしまいたい程の心音。もしも彼が何食わぬ顔で、私を誘い抱こうとする狡猾な男だったならば、私は果たしてこのように無抵抗を続けていたのだろうか。

彼の手が私の内股をそつと開くとスカートがめくれ上がり、そのままストッキングとショーツ越しに陰部を中指で撫でてくる。まだ前戯もそこそこのに浅ましくも濡れているのが彼に露見するのは恥ずかしいと内股を閉じようとするが、元バスケ部エースの筋力は三十路を前にしても衰えてはいないようで、軽々と姿勢を維持させられる。不意に男女の力の差を思い知らされると、その力強さにお腹の奥底が熱くなった。

愛液が下着に浸透する速度は思ったよりも早く、彼の撫でる指の腹で、微かにではあるが明らかに「ぬちゃ」と音が鳴った。

私が昂ぶっている事を証明するその粘り気のある音は、もしかすると人生で初めてじゃないかというくらいに顔を赤く染めた。

「結構照れるんだね」

耳元で囁かれる彼の言葉はあくまで清涼感に満ちていた。

「……別に」

「すごく可愛いよ」

彼は左手で私の陰部を、右手で乳首を撫でていたが、右手を離すと私の顎を掴み、横に向けるよう力を込めた。



しめやかに唇を押しつけ合う。しばらくして彼の舌が私の唇を割って入ってくる。拒絶はしない。彼の舌は、夫よりも細かった。

「……野上君、カシスオレンジ飲んだ？」

返事は無い。私達は無言で互いの舌と唾液を押しつけあう。彼の右手は私の乳房に戻り、果実をもぎ取るように鷲掴みした。左手はすでにショーツの中に侵入して、何度か陰裂をなぞった後、軽く指先を挿入したりしていた。陰核は既に固くなっており、彼の手首が擦れる度に私は彼に舌を吸われながらも時折あられない声を上げた。何度も腰をくねらせ、その度に私の背中に押し当てられる、硬くなった彼の下腹部に顔が火照っていく。もう数分もしない内にこれを挿入される。野上君とセックスをする。夫じゃない男に抱かれる。その確信に近い予測が、益々私の胸を締め付ける。

「渡辺、何か運動してるの？」

「たまにジム行くくらいだけど」

「引き締まってるね。すごいよ」

野上君はうっとりするように呟いた。その言葉は明らかに比較対象の影を感じたが、私は何も言えなかった。彼はそのまま私をゆっくり引き倒すと、まずは自

分が全裸になり、そして私を同様の格好にしようとした。勃起した彼の男性器は明らかに夫のよりも目を引く存在感を放っていた。

「俺、久しぶりだから上手く出来るかわかんないけど」

スカートを脱がせ、パンストとショーツを同時に膝まで下げた後、彼は自信無さげに言った。彼の夫婦生活について追求する勇氣は無い。

「……私もだよ」

そう口にした直後、私は押し潰されそうな程の罪悪感に苛まれた。それを誤魔化すように自分でブラを外す。

私は数日前に夫と肌を重ねていたのだ。しかも野上君に嘘をついたわけではなく、ただ単純に、「自分もセックスは久しぶり」だと勘違いしてしまっていた。私は無意識にいつしか夫との営みを、そういう風には思えなくなってしまうたという事なのだろうか。夫との夜に不満など無かった。ただ、今みたいに心臓が全身を揺らす程に燃え上がり、太股を伝うほど愛液が漏れる事は結婚後の記憶には無かった。

「入れるよ？」

半透明の黒いコンドームを装着した男性器は、まるで彼の胯間から延びた角の

ように雄々しく、思わず私は腰を浮かせてしまった。

「……………うん」

自ら膝を曲げて開くと、彼がその間に腰を下ろし、右手を私の左膝に置き、左手を男性器の根元に添えた。

「夢みたいだ」

はにかんだ野上君の笑顔は、あの頃のままだった。

ゆっくり、彼が私を掻き分けてくる。

柔らかい私を、硬い彼が何なく押しつけていく。

彼の男性器はゴム越しでも非常に熱かった。野上君も苦しそうに、「渡辺の中……………あったかいよ」と囁いた。次第にその熱がどちらのものかわからなくなる。

「すごいね……………野上君の」

「え？」

「……………なんだか、すごく入ってる、って感じがする」

「痛く無い？」

「ん、大丈夫」

視線がばつちりと合う。ただ交差するだけでない。私と彼の間で火花が散った

気がした。

彼の瞳は潤んでいた。畏れと高揚が入り交じった、非日常の中でこそ輝く彩り。きつと私も同じ目をしていただろう。

「動くよ？」

「……いいよ」

私と野上君のセックスが始まった。私達は何かに飢えていたかのように互いを求め合った。彼は私の中に。私は彼の中に。自分を潤す何かがあるんじゃないかと探し求め合った。

両手は何があっても離れまいと強固に握り合った。彼の結婚指輪の冷たさが息苦しくさせる。私の指輪も同様に、彼の顔を背徳に歪ませていた。

喉は相手の唾液を飲み込む為の、舌は唾液を相手に送り込む為の器官となり、彼のピストンがベッド毎私を激しく揺らす頃には、私は彼の唇を甘く噛み、「もつと」と何度も要求した。

彼の腹筋ははつきりと割れており、突かれる度に目の前で軋むそれはとても頼もしく、縫りたいと思わせる切なさで吐息が甘くなりそうだった。

体位を正常位から変えようという提案が出ないほど、私達はセックスに夢中だ

った。まるで二人とも初体験のように、異性の身体に魅了されたのだ。

彼の程よく筋肉質な胸板と、私の上下左右に揺れる乳房は互いにじつとりと汗を帯び、時折密着すると汗が潤滑油となつて肌が混じり合い、二人の身体がドロドロに混じり合うような錯覚に陥った。私の中でガチガチに勃起した彼の男性器も、まるで私の一部なんじゃないかと思えるほどに、私達は一つに溶け合つていった。

「もう、イキそうかも」

どこか申し訳なさそうな彼のその声には大きな悦びを感じた。もつと彼と繋がっていたという欲求も強かったが、それより遙かに、彼を絶頂に導けた事が何よりも気分を昂ぶらせた。

「いいよ……出して」

野上君はペースを落とした。自分だけで昇り詰める事に不甲斐なさを感じたのだろう。そんな彼を少しだけ愛おしく思ってしまう。私は彼の首に両腕を優しく巻きつかせると、「……私もずっとイクの我慢してたんだ。野上君すごいね……私こんなの初めてだよ」と掠れた声で本音を晒した。

男としてもプライドを満たされた彼は射精寸前で張り詰めた男性器で、猛り狂

うように私を突き刺しては引つ搔いた。

私は何度も彼の名を呼んだ。背中を仰け反らせ、恥ずかしげもなく乳房を揺らし、叫ぶように彼を呼んだ。こんな風に夫の名前を情熱的に呼んだ事があつたらうかと、白い高波にさらわれそうな意識の中で罪の意識を感じた。夫に申し訳無いと感じれば感じるほど波は強く高くなり、私の砂漠を飲み込んでいく。

私の呼びかけに応じるよう彼も私への過去の想いを吐いた。今夜幾度となく繰り返される「好きだ」という愚直なほど真つ直ぐな言葉を、いい加減聞こえない振り続けるのは限界だつた。彼に恋慕を囁かれる度に、私の胸の奥の空洞に暖かくも清涼な何かを満たされていくのを感じた。そもそも空洞の存在自体に気付いてはいなかつた。最後に「好き」などと言われたのはいつだつたらうか。記憶を辿ろうにも、野上君の亀頭がお腹を持ち上げる度に、「あっん！」と甲高く挙がる嬌声と共に気化してしまふ。

「くっ、イク」

彼のその言葉に私は全身で幸福を感じた。満たされたと思つた。私の絶頂はまだだったが全く構わなかつた。彼が心地好く射精してくれる事が、私のこのセックスの到達点だつた。

「来てっ……野上君の、気持ち良すぎて、私、もう……」

もはや彼の射精の事しか考えられなかった。彼の右手は私の人生でこれ以上無
いという程荒々しく私の乳房を握りしめた。指の間から乳肉が零れ、その形を
変形させるほどだった。もしかしたら痛みがあったのかもしれないが全く気にな
らなかった。性器の注送だってそうだ。まるで掘削されるような律動に私は胸を
焦がした。男性とはこうも情熱的なものだったと何年かぶりに思いだしていた。

夫も結婚前はこうだったかもしれない。

野上君が私の上で果てると、全精魂を注ぎこんだかのように私に覆い被さって
きた。臆でドクドクと脈動する彼の男根を抱擁しながら、そっと彼の背中に両腕
を回した。

「……お願い……キスして」

私は生まれて初めて、キスで果てた。高熱で焼かれるチーズのように、一瞬で
とろりと意識を弛緩させた。肌で彼の余熱を受け取りながら、私はまさしく天に
も昇る心地で、久しぶりの絶頂を甘受する。臆の中でゴムがどくどくと熱を伴い
膨らむのがわかった。私は何度も野上君にしがみつキながら、「ごめんなさい」
と心の中で謝罪を繰り返し、その度に身体を痙攣させては昇り詰めた。

しばらく無言でそのまま抱き合っていた。十分程だろうか。どちらからともなくそろそろ離れた方が良いんじゃないかという雰囲気の流れ、私達は漸く別個の生き物に戻った。その際に視線を合わせるのは非常に恥ずかしかったが、なんとなく一度だけ唇を重ねると二人してやはり照れくさそうに視線を逸らした。恋人がじゃれるようにするフレンチキス。

私はトイレに行くと言い残して携帯を片手にそそくさとその場を離れた。

すぐにでも夫に連絡を入れたくなかったのだ。きつと野上君も奥さんに連絡を取っているに違いなかった。しかしそれを互いに口に出すのはなんだか憚れた。

個室の冷気に晒されると、先程まで自分が浮遊していた空間や時間が以下に異常だったかに気付く。

夫からは「迎えに行こうか?」とメールがあった。私は「大丈夫。もう帰ってるところだから」と返信を打つと、「男子は皆おじさんになってたよ。健さんの格好良さを再認識した」と付け加えた。メールでも夫を名前で呼ぶのは久しぶりな気がする。怪しまれるかもしれない。でもどうしても、夫を名前で呼びたくて仕方が無かった。あれだけ野上君の名前を呼んで、夫を呼ばないという選択肢は

私の中には無かったのだ。

携帯を閉じると私は大きく息を吐いた。途端にとんでもない事をしてしまったと肩が重くなる。しかし何故か、胸の奥でカサカサとひび割れるような渴きは、いつの間にか消え失せていた。

トイレから戻ると彼は慌てて携帯を仕舞っていた。きっと私と同じように伴侶に連絡を取っていたのだろう。私はそれについて言及しない。彼も同様。無言で交わされる不文律。彼は全裸でベッドに腰掛け、同じく全裸だった私は何を言えれば良いのかわからずに突っ立っている。セックスの余韻が収まると私は急に恥ずかしくなり、胸と下腹部をそれぞれ手で隠してたが、野上君の視線もドギマギとした動揺を隠せないでいた。

「ほ、本当にスタイル良いね」

「の、野上君も鍛えてるんじゃないの？」
ぎこちない会話。先程までの一体感が嘘のよう。

「一応筋トレしてる。俺もジム行こうかな。渡辺はどこ行ってるの？」

「国道沿いのところ」

間を持たす事が目的の会話。気が付けば喉が渇き言葉がつかえそう。

「月謝とかどうなの？」

「結構割安だと思うよ。設備も充実してるし」

「……そっか。じゃあ俺も行ってみようかな」

彼はどこか私の様子を伺うような口調で言った。

「うん。お薦め」

そう応えてはっと気が付く。遠回しに今後も接点を持つ事を容認してしまったのではないだろうか。しかし今更「やっぱり止めといた方が良いよ」などとは言えない。

本当にそうだろうか？

言おうと思えば言えたはず。

いや、そうでなくとも「もう会うのは止めよう」と釘を刺せば良いだけなのだ。

なのに嬉しそうにはにかんでいる彼と目が合うと、何も言えなくなる。

再び屹立しようとしている彼の男根から目を逸らすと、甘い香りを伴った胸騒ぎが肩を震わせる。

「これは、その……はは、ごめん。そうやって女性が恥じらう姿が新鮮で」

彼は慌てて弁明した。取り繕いが無い言葉だと感じた。きっと彼の奥さんは彼の前だと裸でも平気なのだろう。私も夫の前ではそうだ。

「……私もそんなすぐ元気になる人新鮮だよ」

苦笑いで返す。これも嘘偽りの無い言葉。年齢や付き合いの長さを関係無く、夫とは二回戦など望むべくもなかったし、私も必要と感じた事は無かった。でも今は、肩にのし掛かる罪悪感と、肌に残る野上君の感触が拮抗している。

理性と背徳感の勢力図は、私の手を握る彼の優しい手つきだけでいとも容易く崩れた。

何度かキスを交わすと床に膝をついた。眼前でそそり立つ彼の性器はまだ半分程度の勃起だったが、それでも夫より雄々しく感じた。

喉から飛び出そうな緊張を、髪を掻き上げる事で誤魔化して、勢いに任せて亀頭を口に含む。獲れたての果物を思わせた。ふりふりとした感触に、精液の苦さとゴムの匂いが鼻をついた。しかし不快感は無い。むしろ性交独特のその匂いは胸

を高鳴らせる。

フェラチオなどいつ振りだろうか。やはり結婚前まで遡らなければならない。そもそも夫にした回数は両手で事足りる気さえする。

歯を当てないよう唇をゆっくりと滑らせていく。喉の奥に亀頭が当たりそうになると、一旦そこで頬張るのを止める。口の中は彼で一杯となり苦しかったが、なんとか舌の腹を肉竿の中腹辺りに押しつけて微かに上下させた。

「う」

それだけで彼は身体を震わせ、心地よさそうな声を上げた。

その忌憚の無い反応に私も心が浮き上がる。

首を引くと不意に「くちゅ」と私の唾液が音を鳴らした。いやらしい音で顔が熱くなるが、同時に彼の亀頭も熱を帯びたのが唇越しに伝わった。恥ずかしくて堪らなかったが、口の中で硬さを取り戻しつつある男性器に対し、妙な責任感を抱いてしまい、そのまま首を前後に振る。

「くちゅ、くちゅ、くちゅ」と音が鳴る度に、彼は次第に振り返り、熱した石のような硬さを取り戻した。

少し顎に疲労を感じ始めると、彼は「疲れた？ もう良いよ。ありがとう」と

勞つてくれたが、その優しさが私の中で乾いた『女』に火を着ける、否、水をくべる。

「んくん。大丈夫。もうちよつとしてあげるね」

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

いやらしいと思つていた音は、さらに淫靡さを増していく。

ちゅば、ちゅば、ちゅば。

「うっ、ああ」

頭上で彼の吐息が荒くなると、彼は口の中で完全にガチガチに勃起しきつていた。唇が火傷しそうな程熱く、どれだけ舌で押ししてもビクともしない。率直に言うと、彼の男性器を愛おしく感じていた。このまま射精に導きたいとすら思つた。

いつの間にか私達が両手の指を搦めて握りあい、その結果私は口だけでの奉仕を強いられ、それはさながら口唇が性器に成り代わつたような錯覚を覚えたが、決して悪い気はしなかつた。

「すごく気持ち良いよ」

「本当に？ あんまりした事ないんだけど」

「渡辺にしてもらってるのが夢みたいだ」

あまりに彼がいじらしいのでからかいたくなる。亀頭を甘噛みすると彼は堪らなそうに震えた。

「痛かった？ 夢じゃないでしょ？」

「さっきの、凄かった」

「うそ。これ？」

私はじゃれつくように彼の亀頭を唇で啄む。

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ。

「くっ、う、やばいって」

一々反応する彼を堪能すると、私だけが褒められているのは公平性に欠けると思い、「……野上君の、おつき」と啜えながら言った。

「だ……今ままで何番目？」

彼は明らかに「旦那さんと比べて？」と尋ねたがっていたが、途中で理性が勝ったように言い直していた。

私の唾液ですっかりテカテカになった彼のカリ首を重点的に、唇でじゅぽ、じゅぽ、じゅぽ、と浅く四回口淫すると、「……一番だね」と答えた。

そのまま裏筋に舌を這わせて降下し、陰囊を舌で愛撫していく。

「大きい好き？」

そもそも男性器の形状についてそれほど考えた事は無かったが、野上君のそれが非常に気持ち良かったのは事実なので、睾丸を舌で持ち上げながら頷く。

「俺の、気持ち良かった？」

「……うん」

素直に答える。その際に彼の男根がびくと跳ね上がったのは彼の優越感を刺激した所為か、それとも睾丸を舌で突いた影響かはわからなかった。

「……じゃあもつかいする？」

彼も躊躇うところがあつたのだろう。少しの間を置いて投げかけられたその質問に、私は唇で睾丸を啄みながら答える。

「もう帰らないと」

「大丈夫。すぐ終わるから」

執着を冗談めかして口調で誤魔化す彼はまるで学生のように、でもそんな風に形振り構わず誘われる事がどこか嬉しくもあつた。

「何それ」

私がクスリと笑うと彼も安心したのか顔を綻ばせる。

「渡辺のすごい良かったからさ。きつと次も我慢出来ない」

「やだ。おじさん臭いよそれ。なんだかセクハラっぽい」

「そうかな」

「そうだよ」

ちゅっ、と小気味良い音が立つくらいに睾丸にキスを交わすと、彼が私の手を引いてベッドの上に優しく引き上げた。

「四つん這いになって」

「……ん」

間接照明のみの薄暗さとはいえ互いに目はどうに慣れている。夫以外の男性に全裸でお尻を向けるのは何とも言い難い背徳感を感じて、落ち着きを取り戻し始めていた脈拍が再びトクトクと全身を駆け巡り始めた。

背後でカサカサとゴムの包装紙を破く音と、それに続いて性器に装着しているであろう音が聞こえる。振り返って確かめたり、言葉を投げかけて確認するような野暮はしない。一度肌を重ねただけなのに、彼との距離感は少し心配になるくらい気安くなってしまっている。

「挿入れるよ？」

「ん」

ゆっくり、遠慮がちに、しかし確かな熱気と、力強い存在感を伴って、彼の亀頭が私を押し広げて入ってくる。その時点で私は手の平で上半身を支えるのを諦めて肘をついた。完全に繋がればきつと腕に力など入らなくなる事を確信する。

やがて彼の全てが余すこと無く私の中に到達する。

「うう」

彼の声が背中に掛かる。私も似たような声を喉奥に押し込めた。ただの快楽による呻きではない。それは禁断の果実を口にしたものだけが口にする吐息。結ばれてはいけない身体だけが与えてくれる、あまりに甘美が過ぎる融解。

彼の両手が獲物を掴む鷲のように私の臀部に指先を食い込ませる。

「本当に……夢みたいだ」

感悦に極まったその言葉を皮切りに彼は注送を始める。穏やかではあるが確実に私の奥を突き、結合を解ける寸前まで腰を引いた。じつくりと咀嚼するように長いストローク。

「あっ……あっ……んっ……はあ、ん」

ゴム越しても彼のカリ首は一突き毎に、私の背中に痺れるような性感を流した。

「の、野上君……これ、すっごい、気持ち良いよ……」

「本当？」

「う、ん……あつ、あつ、それ、あつい……これくらいのが、丁度良くて……はあ、ん……変になりそう……んっ、んっ、あつ、あん」

「もう少し動いても良い？」

私の膣内は既に溢れる程愛液が漏れており、彼が動く度にこの程度の摩擦では物足りないとはかりに淫靡な音を立てていた。

私としては本当に心地良かったので、このペースを維持して欲しかったが、それよりも野上君が良くなる事を優先したかった。

「大丈夫……あっん……野上君の好きに動いて……野上君が、気持ち良いように、して……あつ、はあ」

彼は無言で私の背中を優しく摩った。その行為には私への感謝や敬意が含まれていた。

不意に彼の吐息がうなじに掛かる。程よく鍛え込まれた胸板や腹筋の熱気が背

中に伝わる。覆い被さってきているようだ。

そしてトン、トン、トン、と小刻みに彼の下腹部が私の臀部を打ち始める。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ」

彼の左手が、私の左手を上から押さえつけるように置かれる。まるで待ちわびていたように指が絡み合う。

「はあ、はつ、んつ、あつあつ、野上君、これ……あつあつ」

左手で上半身を支えた彼は、右手を乳房に伸ばす。

「……これ、気持ち良すぎて……私、すぐイっちゃうかも」

四つん這いになり、真下に垂れた乳房を彼の大きな手の平が受け止めるように強く揉んだ。

「良いよ……俺も、ごめん……すぐ出そうかも。やっぱり渡辺の、凄いよ」

彼は不甲斐ないのか恥ずかしそうに言ったが私は安堵していた。一突きされる度に目が霞むこの快感は、やがて足腰が立たなくなり帰宅が困難になってしまうのではないかと危惧してしまいそうなほど衝撃的だった。

「あつ、あつ、あつ、あつ、だめっだめっ、野上君の、奥まで届くんだから……あつあつ、そんなされたら、やつ、ああ」

彼は上体を起こすと再び両手で私の腰をがっちりと掴んだ。

思いやりに溢れたピストンは鳴りを潜め、はち切れんばかりの男根をガツガツと貪るように打ち付けてくる。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

「好きだ」

過ぎたる昔日の想いとはいえ、その言葉を発するのに胸が張り裂けそうな葛藤は嫌という程伝わる。彼と同様に、私も大切な人を裏切っている。

「激しい、よ……こんな、すぐ……あっいつ、いつ、いつ、あっあんっ、あんっ！ あんっ！」

「渡辺……！ 好きなんだ！」

共犯者として互いに慰め合う。互いの欠落を埋めあい、渴きを舐め合う事で癒やしている。

「あっ、イク！ あっ、イク！ イクイク！ おまんこ、イっちゃう！」

野上君は射精時の万能感に流されてか不文律を破る。

「旦那さんより良い？」

その瞬間、私の心臓に鋭利な何か突き刺さる。夫の顔が脳裏に浮かぶと絶頂

寸前の悦樂で蕩けた表情筋が苦々しく固まった。

稲妻に打たれたように、私は夫を愛してる、という事実を強く再確認した。
なのに私は、野上君に激しく求められながら、首を前後に振っていた。

「……全然違う……野上君とのセックスが、一番気持ち良い」

彼はその言葉で果てた。下腹部を隙間無くびったりと私の臀部に押しつけ、肉体的にも精神的にも満足しきった吐精を続ける。コンドームの液溜まりが震える程にビュルビュルと撃ち放たれた精液を、私は涙を流しながら受け止めていた。

野上君は暫くの間射精を続け、私はその熱を感じる度の中で夫へ謝罪すると同時に、あられも無い声を上げながら腰を痙攣させていた。